

Title	新しい歌を歌おう
Author(s)	ナイティンゲール, 亜衣
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume28, 2013.3 : 115-122
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4473
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

新しい歌を歌おう

ナイティンゲール 亜衣

はじめに

今回の全学礼拝懇談会の発題のお話をいただいた時、全学礼拝で奏楽を担当しているものの、教会音楽を学んできたわけでもない者が賛美について発題をすることに躊躇いたしました。しかし、菊地順大学チャプレンより、最近の学生が礼拝で賛美歌を歌わなくなってきたことや若者に合わせた礼拝賛美を模索されているとのお話を伺い、本学でクリスチャン学生として学生生活を送り、職員として学生に関わってきた立場から、私自身が出合ってきた様々な学校、教会、集会の礼拝賛美の経験をもとに、全学礼拝での新しい賛美の提案をさせていただけるのではないかと発題をお引き受けしました。

一 賛美との出会い

キリスト教主義学校に勤める私たちは、全学礼拝でなされる奨励や賛美が、果たして学生たちの心に留まっていたのだろうか。疑問に思うことがあるのではないだろうか。実は、私の身近にキリスト教主義学校の礼拝により信仰の実を結んだ小さな例があり、皆様の励ましになればと思います、お分かちさせていただきます。その小さな例とは、私の家族です。私の家族は、キリスト教との関わりが全くといってない家族でしたが、私が小学二年生の時、山口県の中高一貫のキリスト教主義学校に通っていた母がある日突然、「昔歌っていたクリスマス歌を歌いたくなつた」と近所の教会のクリスマスコンサートに出席しました。その後、母は継続して教会に通い、クリスマスチャントとなり、続けて姉、私、父の順に家族全員がクリスマスチャントとなりました。母は、若い頃にキリスト教主義学校の礼拝と賛美によって種を蒔かれ、三十年後に刈り取られることとなりました。時間がかかりましたが、一つの種が芽生え、刈り取られ、その種は家族へと蒔かれました。本学の学生たちにとって全学礼拝は、単なる大学の行事であって、礼拝出席レポート提出のための義務でしかないかもしれません。本学の礼拝で開かれる聖書の箇所、祈り、賛美が学生の今の励ましとなり、将来、聖学院を思い出す時に再び礼拝に行ってみたいと思えるような礼拝との出会いとなり、そして何よりも神様との出会いの礼拝となることを願いながら発題させていただきます。

二 アメリカ提携校の学生礼拝の賛美との出会い

まず初めに、本学の提携校であるアメリカの二校の学生礼拝と賛美の出会いをご紹介します。

一校目は、私が本学在学中、交換留学生として留学したオグルソープ大学での礼拝です。この大学は、キリスト教主義大学ではありませんが、クリスチャン学生による礼拝が週に一度、夕方にキャンパス内で行われていました。礼拝では、Tシャツにショートパンツの牧師が冗談を交えて聖書の話をし、賛美はワーシップリーダーと呼ばれる歌のリーダー、コーラス、ギター、ベース、キーボード、ドラムから成るワーシップチームがロック調の賛美をしていました。伝統的な賛美歌や聖歌とは全く異なり、現代的でメロデーが単純、留学生の私でも歌詞を容易に理解することができました。何よりも周りの学生たちが立ち上がり、歌詞が映し出されたスクリーンを見ながら手を叩き、体を揺らし、手を挙げ、目を閉じながら歌っている光景には驚かされました。「さすがアメリカ人、ノリがいいな」と横目で見ながら、感情を露わに生き生きと賛美している姿を羨ましく思いつつ、賛美歌や聖歌を直立姿勢で歌う礼拝形式で育った私には気恥ずかしくもありました。アメリカの教会でも勿論、本学の全学礼拝のように賛美歌を使い賛美する教会はありますが、大学生の私にはオグルソープ大学の礼拝のような若者向けの賛美に親しみを感じました。牧師の話や聖書の学びは英語で理解が困難でも、賛美をすることを楽しみに継続して学生礼拝に出席していました。

二校目にご紹介する学生礼拝は、本学とほぼ同じ学生数のキリスト教主義大学、ホープカレッジです。二〇一一年に出張で訪問した際に、同大学の教授に全学礼拝の話を伺いましたが、それは実に興味深いものでした。ホープ

カレッジの全学礼拝は、月・水・金の週三回、十時三十分〜十時五十二分の二十二分間に行われているようで、学生の礼拝出席義務はありません。それにもかかわらず、各礼拝に千人の学生が自主的に出席するそうです。礼拝開始前はチャペル入口に学生が行列を作り、チャペル内は席のない学生が床に座つたり、立ち見になるそうです。学生がこれほどまで礼拝に出席する理由の一つは、学生で構成されるワーシップバンドによる賛美、たそうで、ホープカレッジのワーシップチームは、音楽の技術はもとより、賛美に対する信仰の姿勢も面接で問われる程、大学側と奉仕学生の礼拝へのコミットメントが高いことを窺うことができます。大学ではその他に賛美歌や伝統的な賛美曲を歌うクワイヤ、ブラックゴスペルを歌うゴスペルクワイヤが卒業式やクリスマス等の大学行事で活躍しており、大学内で上手く共存しているそうです。様々な賛美形式を行事や礼拝者に合わせて取り入れているという姿勢を本学でもさらに奨励していったらよいのではないのでしょうか。ホープカレッジの礼拝のように、本学のこのチャペルに立ち見ができるほどの学生が賛美をしている姿を想像してみてください。素晴らしい光景ではありませんか。

三 旧約聖書にみる賛美

それでは、聖書の中で「賛美の書」と呼ばれている旧約聖書の詩篇（新改訳）では賛美について何と記されているのでしょうか。

◇ 誰が賛美するべきなのか。

「主をほめたたえよ。日よ。月よ。主をほめたたえよ。すべての輝く星よ。」（詩篇一四八篇三節）

人間は勿論、日、月、星などの被造物すべては、創造主である神様をほめたたえるように命じられています。

◇ どんな歌を歌うのか。

「主に新しい歌をうた歌え。」（詩篇一四九篇一節）

「新しい歌」とは、文字通り、「新曲」という意味もあるかもしれませんが、古い罪の中にいた者がキリストの十字架と復活によって新しい者とされたことを知ったその新しい喜びで神を賛美することです。日々、新しくされた心をもって、感謝の歌を歌えと記されています。

◇ どのように賛美するべきなのか。

「タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。」（詩篇一五〇篇四節）

タンバリンと踊り、緒琴と笛とで、すなわち様々な楽器で主を賛美するように、と記されています。他に詩篇では、以下のように賛美するように記されています。

- ・手をたたく（詩篇四七篇一節）
- ・手を上げる（詩篇六三編四節、一三四篇二節、一四一篇二節）
- ・大声で叫ぶ（詩篇四七篇一節、六六篇一節）
- ・ひれ伏す、ひざまずく（詩篇九五編六節）

このように、手を叩いたり、手を上げる賛美方法は、私自身、若者独自のもので、熱狂的、カリスマ的な礼拝の仕方だと思っていました。しかし、旧約聖書のもう一つの箇所を読んだ時、その思いは取り去られました。旧約聖書の第二サムエル記六章には、ダビデ王の興味深い賛美の姿が記されています。長年ペリシテ人に神の箱（栄光と祝福）を奪われたダビデは、長い年月を経て、ついにダビデの町に神の箱を運び込むことができました。その時、「ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスターネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った」（五節）とあります。ダビデは、王であるにもかかわらず力の限り、狂ったように踊ったとも記されています。サウルの娘ミカルはそれを見て、彼を心の中で蔑みましたが、ダビデはミカルに対し、「主の前で喜び踊るのだ。私はこれより、もつと卑しめられよう。」（二一―二二節）と返答しました。ダビデは神のなされた素晴らしい技を受け、人の目を物ともせず、全身全霊で賛美しました。私たちクリスチャンがキリストの救いで喜び満ちる時、心躍らされ、力の限り踊り礼拝することは、人間としての自然な姿であるこということをダビデ王の賛美から学ぶことができるのではないのでしょうか。

四 ナミビア共和国での賛美との出会い

私が出会った賛美の中で最も印象的だったのは、アフリカ大陸のナミビア共和国で出会った賛美です。訪問した地域は、非常に貧しい地域でしたが、そこで経験した礼拝は、私の礼拝と賛美の概念を覆すものでした。礼拝に行くからと連れ出された何もない乾いた広大な土地に一本の大木があり、その下に段々と人々が歩いて集まってきました。その人々が輪になって丸太に腰を下ろし、突然その中の一人が現地語の歌を口ずさみ始めました。すると、

周りの人々が続いてハーモニーや掛け声を掛け始め、礼拝が始まったことを知りました。延々と続く声と手拍子が織りなすハーモニーは美しく、神聖なものでした。教会の建物もなく、楽器、音響設備、礼拝式次第、司会者もワ―シップリーダーもいない礼拝でしたが、現地の人々に馴染んだ自然で豊かな礼拝でした。賛美をしたい人が歌い出せば賛美となり、礼拝する心をもった人が集まればその場所が礼拝堂となるのだと気づかされ、スタイルや完成度に凝り固まった自分の賛美への姿勢を砕かれる経験でした。

五 新しい賛美の提案

礼拝は神様が備えられる場であり、礼拝者である私たちの心が神様に受け入れられるようまず整えられている必要があります。それと同時に、初めてキリスト教に触れる学生たちがより身近に、そして自然に感じられる礼拝となるように私たち教職員が工夫していく必要もあると考えます。全学礼拝に出席するのは他の誰でもない学生たち、福音に触れてほしいのも学生たちです。その学生たちが礼拝出席者であることを前提に、学生の文化的な背景、年齢、クリスチャンが多いのか、そうでないのかを考慮に入れる必要があります。例えば、一般的にも人気のあるゴスペルミュージックを取り入れても良いかもしれませんが、学生が歌詞の意味や背景を知ることができるように賛美歌の歌詞を解説しながらテンポを上げて賛美してみても良いかもしれません。若者に身近であるロックやポップ音楽に近い、バンド形式のワ―シップソングでもいいかもしれません。ワ―シップソングは、単純なメロディと現代的なことばの歌詞の繰り返しであるため、容易に意味を理解することができます。また、歌詞がスクリーンに映し出されるため、顔を上げ、時には両手を挙げて賛美します。最近、若者が集う教会の多くは、礼拝内や夕方礼拝で、

このような若者向けのワーシップソングが取り入れられています。ワーシップソングには、海外で作られた曲が日本語に翻訳されていたり、日本人が作曲した日本語の歌もあります。

本日は、本学の全学礼拝での新しい賛美の提案として、実際にギターとピアノの伴奏で、『ほめたたえよ』『永遠にあなたと』の二曲を皆様と賛美したいと思います。ギターと賛美リードは、本学総合研究所特任研究員、英語非常勤講師である川田牧人先生です。

『ほめたたえよ』

作詞／作曲 不明

ほめたたえよ あたらしい歌で ほめたたえよ 朝に夕に
義なる主にむかい 力ある限り 義なる主にむかい 力ある限り

『永遠にあなたと』

作詞／作曲 長沢崇史

ただ一つのこと 私は願う あなたのそばで 永遠に生きること
永遠に、永遠に あなたと生きる この口は歌い続ける あなたの愛を

(二〇一二年二月八日、二〇一一年度「全学礼拝懇談会」発題
全体課題「全学礼拝の豊かな守り方——賛美の恵み」)